可愛い女

訳：増子貴子　川北厳己

　退役８等官であったプレミャーニコフの娘、オーレンカは物思いにふけって自分の屋敷の玄関に腰かけていた。その日は暑く、蠅がしつこくまとわりついてきて、間もなく夕方になると考えると心地よく思われるほどだった。東から黒い雨雲がやってきて、そこから時折湿気が流れてきていた。庭の真ん中には、その外庭の離れを間借りしている遊園地「チヴォリ」の興行主兼オーナーのクーキンが立っていて、空を見上げていた。

「まただ！」とクーキンはがっかりして言った。「また雨が降る！来る日も来る日も雨つづき、まるで当てつけだ！何てこった！破産しちまう！毎日とんでもない大損だ！」

　クーキンは手を叩いてからオーレンカに向かってこう続けて言った。

「オリガ・セミョーノヴナ、これが我々の人生だ。泣きたいほどさ！働いて、努力して、苦しんで、夜も寝ずに、どうしたら良くなるかと考えている、だのに結果はどうだ？　それに無学で粗野な客がいる。あいつらに上等なオペレッタや夢幻劇、小唄を歌う芸人を見せてやったところで、そんなもの必要だろうか？そんなものを見てあいつらに理解できることがあるだろうか？あいつらには見世物小屋が必要なんだ！あいつらには安っぽいものを与えてやれ！おまけに、天気を見てごらん。ほぼ毎晩雨だ。5 月 10 日に仕込んでからというもの、5 月も 6 月もずっと同じで、ひどいとしか言いようがない！客がやってこないというのに、俺は賃貸料も出演者への給料も払わなければならないのか？」

　翌日も夕方には雨雲がやってきて、クーキンはヒステリックに笑ってこう言った。

「まあいいさ！どうにでもなれ！遊園地中全て水浸しにして、なんなら俺のことも水浸しにするがいい！この世にもあの世にも、俺には幸せなんてあるもんか！役者たちは俺を裁判で訴えるがいい！裁判なんてどうってことないさ！シベリアへ強制労働だって行ってやる！絞首刑だっていいさ！は、は、は！」
そしてその翌日も同じだった...
　オーレンカはクーキンの話を黙って、真剣に聞いており、目に涙を浮かべることもあった。結局のところ、クーキンの不幸に胸動かされ、オーレンカはクーキンを好きになったのだ。クーキンは小柄で痩せぎすで、黄色っぽい顔をしており、揉み上げは櫛で撫でつけられ、弱々しいテノールの声で話をし、そして話すときは口を歪めるのだった。クーキンの表情には常に絶

望が漂っていたが、それがオーレンカに真の深い感情を呼び起こすのだった。オーレンカは常に誰かに恋をしていて、好きな人なしではいられなかった。以前は父親のことが好きだったが、その父親も今や病気になり、暗い部屋で肘掛け椅子に座り苦しそうに息をしていた。それから、オーレンカは２年に１度ブリャンスクからやってくる伯母さんも好きだった。しかし、もう少し昔の中学生の頃に好きだったのは、フランス語の男の先生だった。オーレンカは、物静かで温厚で思いやりのあるお嬢様で、大人しく柔らかい眼差しをしており、とても健康的だった。オーレンカのぽっちゃりとしたバラ色の頬、黒いほくろのある柔らかな真っ白なうなじ、何か楽しい話を聞いているときに浮かべる優しい無邪気な微笑みを眺めていると、男性たちは「悪くないな・・・」と思い、自分たちもまた、微笑みを浮かべたものだった。そして、女性の客人たちも、思わず会話の最中にオーレンカの手を取ると、感極まってこう口にするのだった。
「可愛い子ね！」

　オーレンカが生まれてからずっと住んでいて、遺言状では彼女の名義になると書かれているこの家は、街はずれのジプシー街にあり、遊園地「チヴォリ」から遠くはないところにあった。毎日夕方や夜に遊園地で音楽が演奏されている様子、打ち上げ花火のはじける様子がオーレンカの耳に入っている間、彼女はクーキンが自分の運命に吠え、自分の主たる敵―冷淡な客―に攻撃を加えているのだと思ったものだった。オーレンカの胸のうちは甘ったるく静寂を保ち、ちっとも眠たくなく、朝方にクーキンが帰宅すると、オーレンカはカーテン越しに顔と肩を片方だけ見せて優し気に笑いかけながら、静かに自宅の寝室から小窓をノックしたものだった。

　クーキンがプロポーズをして、２人は結婚した。そしてクーキンがオーレンカのうなじと、丸々として健康な肩がいかにも彼女らしいのを見止めると、手を叩いてこう言った。

「可愛い子だ！」

　クーキンは幸せだったが、結婚して以来夜に雨が降り続けたものだから、その表情から絶望の色が消えることは無かった。

　結婚後、２人は仲睦まじく暮らしていた。オーレンカはクーキンと窓口に座ったり、遊園地の列を眺めたり、支出欄に記入したり、給料を支払ったりしていて、オーレンカの真っ赤な頬や、愛らしく純真で輝きにも似た笑顔が窓口の小窓にも、舞台袖にも、ビュッフェにも現れるようになった。そしてオーレンカは既に自分の知人たちに対し、この世で最も素晴らしく、重要で必要とされているものは―劇場であり、真の楽しみを享受し、教養を身に着け人道的になることは劇場でしかできないと言っていた。

「でも、それがお客さんたちに理解できるかしら？」と、オーレンカは言うのだった。

「お客さんたちが必要としているものって、見世物なんですもの！昨日も『さかさま？のファウスト』を上映したのに、桟敷席はほぼガラガラよ。なのに、イワンちゃんと一緒に何か低俗な出し物を扱うと、劇場は超満員になるの。明日はイワンちゃんと一緒に『地獄のオルフェウス』を上演するから、いらしてくださいね。」

こうして、劇場や俳優についてクーキンが言ったことを、オーレンカも繰り返し言うのだった。オーレンカはクーキンと同様に、観客が芸術に対して無関心であるとか、無知だとか言って軽蔑したり、リハーサルに介入したり、俳優たちにダメ出しをしたり、音楽家たちの行動を見張っていた。そして、地方新聞に劇場についての否定的な批評が出ると、オーレンカは涙を流し、その後編集部へ直談判に行くのだった。俳優たちはオーレンカが大好きで、「イワンちゃんと一緒」とか「かわい子ちゃん」と呼んでいた。オーレンカは俳優たちに情けをかけ、少しずつ給料の前貸しに応じていたが、もしそれで騙されたと分かっても、オーレンカはこっそり涙を流すだけで、夫に愚痴をこぼすことはなかった。

冬も２人は仲睦まじく暮らしていた。ひと冬、街の劇場を借りると、その劇場を短期間ウクライナの劇団や奇術師、地元のアマチュアに又貸しした。オーレンカはふくよかになり、身体中喜びに輝いていたが、クーキンは痩せ細って黄色っぽい顔色になり、商売の方は冬の間中ずっと悪くなかったのに、大赤字だとこぼしてばかりだった。夜になるとクーキンが咳き込むので、オーレンカは木苺や菩提樹の花を煎じて飲ませたり、オーデコロンを塗ってあげたり、自分の柔らかいショールに包んであげたりした。

「何て素敵な人かしら！」クーキンの髪を撫でながら、オーレンカは心の底から口にするのだった。「何て愛おしいの！」

大斎期にクーキンが一座を募集するためにモスクワへ行ってしまった後、オーレンカは彼がいなくては寝ることができず、ずっと窓辺に腰かけて星を眺めていた。この時、オーレンカは自分のことを、鳥小屋に雄鶏がいないと同じく一晩中寝ずに不安を感じる雌鶏になぞらえていた。クーキンはモスクワに長居している間に、復活祭には戻ると手紙に書いてよこし、また数通の手紙を通じて「チヴォリ」の仕事についての指示を出していた。しかし、復活祭前の月曜日の夜遅く、突然に門を叩く不吉な音が響いた。誰かが樽を叩くような調子で木戸を叩いていたのだ。ドン、ドン、ドン！眠気眼の料理女が裸足のまま門を開けるために水たまりを駆け出した。

「どうか開けてくださいまし！」誰かが門の向こうで低いバスで話していた。「あなたに電報をお持ちしました！」

オーレンカは以前にも夫から電報をもらったことがあったが、今回はなぜだか卒倒しそうになっていた。震える手でオーレンカは電報の封を切ると、次のような文章を読んだ。

「イワン・ペトローヴィチは本日急死されました。マザモって火曜日のソウキでの取り仕切りをお待ちしております。」

電報にはこのように「ソウキ」とかさらに良く分からない「マザモって」という言葉が書かれていた。署名はオペレッタ一座の演出家のものだった。

「あなた！」とオーレンカは声を上げて泣いた。「うちの愛しいイワンちゃん、あなた！何のために私たちは出会ったの？何のために私はあなたという人間を知り恋してしまったの？あなたの可愛い、哀れなオーレンカはこれから誰を頼って生きていけばいいの。かわいそうで不幸なオーレンカを・・・」

クーキンは火曜日にモスクワのワガニコヴォ墓地に埋葬された。オーレンカは水曜日に帰宅すると、自室に入った瞬間ベッドへ倒れ込み、家の外や隣近所に聞こえるほどの大声で泣き出した。
「かわいい人！」お隣さんは十時を切りながら言った。「かわいいオリガさんが、ねぇ、あんなに嘆き悲しんでいるよ！」
3ヶ月ほどたったある日のこと、オーレンカは深く喪に服し、悲しそうにミサから家へ帰っているところだった。たまたま、近所に住んでいるワシーリイ・アンドレイチ・プストヴァーロフという、商人ハバカーエフのところの材木置き場で現場監督者をしている男と一緒だった。プストヴァーロフは、麦わら帽子に金のチェーンのついた白いベストを着ており、その出立ちは商人というより地主のようであった。

「どんな物事にも定めというものがあるんですよ、オリガさん」と、彼は同情を込めた落ち着いた口調で話しかけた。「ですから、もし近しい方を亡くされたのであれば、それは神様の思召しですからね、そういうときは気をしっかり持って、大人しく耐え忍ばねばなりません。」
木戸までオーレンカを送ると、プストヴァーロフは別れの挨拶をして去っていった。この後は一日中オーレンカの耳には彼の落ち着いた声が響き、目を閉じれば彼の黒々とした顎ひげが浮かんできた。オーレンカはプストヴァーロフをとても気に入ってしまったのだ。それに、どうやら彼の方もオーレンカに惹かれていたらしく、しばらくすると、オーレンカのよく知らない年配のご婦人がコーヒーを飲みにやってきて、テーブルにつくやいなや、すぐさまプストヴァーロフは立派で信用できるだの、あの人のところならどんな女性だって喜んでお嫁に行くなどと話し始めた。3日後には、プストヴァーロフ本人がやってきた。彼は長居はせず、10分程度居ただけで口数も少なかったが、オーレンカは彼のことが大好きになってしまった。どれくらい大好きかというと、一晩中眠れず、熱病にでもかかったみたいに身体が火照るほどであったので、翌朝になるとあの年配のご婦人のところへ使いを出した。ほどなくして結婚話がまとまり、その後挙式となった。
プストヴァーロフとオーレンカは結婚して、仲睦まじく暮らしていた。普段プストヴァーロフは昼飯時まで材木置き場にいて、その後用事を済ませに出かけていった。オーレンカがプストヴァーロフと交代すると、事務所に座り夕方までそこで請求書を書いたり商品を売ったりしたものだった。

「今、木材は年 20%ずつ値上がりしているのよ」オーレンカはお得意様や知人に話していた。「なんということでしょう。これまで私たちは地元の木材を売っていたのだけれど、今ワシーリイちゃんは毎年木材を求めてモギリョフ県まで行かなければならないの。それにしても価格の高くなったこと！」とオーレンカは恐ろしさのあまり手で両頬を隠して語ったものだった。「価格のまあ高いこと！」

オーレンカは自分が木材をもう長いこと商っていて、人生で最も重要で必要なものは木材であると思えていて、彼女にとってどこか愛おしく、感動的に聞こえる言葉と言ったら、梁、丸太、屋根板、薄板、小割、木摺材、運び台、背板といったものだった。毎晩オーレンカが眠っていると、板材や背板の山、あるいはどこか遠くの町へと木材を運ぶ馬車の途切れなく長い列を夢に見たのだった。またある時は、12 アルシン 5 ヴェルショーク（9m 弱）の丸太たちの連隊が、立って戦争のように材木置き場に向かって押し寄せてきて、丸太や梁や背板がぶつかって乾いた木の音が響きわたり、木材たちが倒れては起き上がってうずたかく積みあがっていくという夢を見た。オーレンカが夢の中で叫ぶと、プストヴァーロフは彼女に優しく語りかけたものだった。

「オーレンカ、どうしたんだい？十字をお切り。」
夫の考えが、そのままオーレンカの考えとなった。もし夫が、部屋の中が暑いとか、近頃景気が良くないと思えば、オーレンカもそう思うのだった。夫が娯楽の一切を嫌って、祭日には家にいたので、オーレンカもそうした。
「貴女はいつも家か事務所にいらっしゃるのね。」と知り合いは言った。「可愛いオリガさん、劇場でもサーカスでも行ってらっしゃればよろしいのに。」
「私とワシーリイちゃんには、劇場に行く暇なんてありません。」オーレンカは落ち着いた口調で答えるのだった。「私たちには仕事がありますので、つまらないことをしている場合ではないんです。劇場なんて何がいいんでしょう。」
毎週土曜日には、プストヴァーロフ夫妻は徹夜祷へ行き、祭日には朝早くからミサへ行った。そして、教会から帰るときには、感極まった表情で 2 人並んで歩いているのだが、その 2 人からはいい匂いが漂い、オーレンカの纏う絹のドレスはさらさらと心地よい音をたてるのだった。家に帰ると、2 人は菓子パンと一緒に、色々なヴァレーニエを添えたお茶をいただき、その後にはピローグを食べた。毎日お昼には、中庭や門の向こうの通りの方まで、美味しそうなボルシチや焼いた羊やカモの匂い、精進日には魚料理の匂いがしていたので、食欲をそそられずに門のわきを通り過ぎることなどできないほどだった。事務所では常にサモワールが沸いていて、お得意さんたちはお茶とブーブリクでもてなされたのだった。週に一度、夫婦は浴場へ行き、そこから 2 人とも頬を赤く上気させて、肩を並べて戻っていくのだった。
「ええ、楽しく暮らしております。」とオーレンカは知人たちに言った。「おかげさまで。どなたも、私とワシーリイちゃんのように暮らせますように。」

プストヴァーロフが木材を求めてモギリョフ県に行き留守の間、オーレンカはひどく寂しくなり、毎晩寝ずに泣いていた。時折夜に、離れを間借りしている若い連隊付き獣医のスミルニ

ンがオーレンカのところにやってくることがあった。スミルニンはオーレンカに何か話をしたり、トランプで遊んだりし、そのことがオーレンカの気晴らしになった。特に面白かったのは、スミルニンの個人的な家庭生活の話だった。スミルニンは結婚していて息子もいたが、妻が浮気をしたために妻と離婚した。そして今、スミルニンは妻を憎みつつも、息子の養育費として毎月 40 ルーブルを彼女に送金していた。この話を聞きながらオーレンカはため息をついて首を横に振り、スミルニンのことをかわいそうに思っていた。

「ああ、神のご加護がありますように」とオーレンカはスミルニンと別れの挨拶をし、ろうそくを持って階段まで見送りながら言った。「私と退屈しのぎをしてくれてありがとう、貴方が健康でありますように。」

そしていつでもオーレンカは夫に倣い、お堅い調子で思いやりのこもった物言いをするようになっていた。獣医はもう下のドアの向こうに消えてしまったが、オーレンカは彼に呼びかけてこう言った。

「ねぇ、ウラジーミルさん。奥様と仲直りなさるといいわ。せめて息子さんのためにも奥様を許して差し上げて。坊やだって、きっと全てわかっているわ。」

そして、プストヴァーロフが帰宅すると、オーレンカは、獣医のことや彼の不幸な家庭生活のことを、小声で夫に話して聞かせ、2 人ともため息をついて首を降ると、獣医のところの男の子はきっとお父さんがいなくて寂しがっているだろうと話し合った後、ある変わった方向へ考えが巡り、2 人とも聖像の前に立つと、地面につくほど深々と礼をして、子どもを授かりますようにと祈った。

このように、プストヴァーロフ夫妻は、静かにゆったりと、愛し合いながら仲睦まじく 6 年間暮らした。しかし、ある冬、プストヴァーロフは倉庫内で熱いお茶をたっぷり飲んでから、材木の引き渡しで帽子も被らずに外へ出たため、風邪をひき、病気になってしまった。いろいろ良いお医者さんたちに診てもらったものの、病を克服できず、4 ヶ月の闘病の末にプストヴァーロフは亡くなった。こうして、オーレンカは再び未亡人になった。

「哀れなオーレンカはこれから誰を頼って生きていけばいいの、あなた！」夫の葬儀を終えて、オーレンカは大声で泣いた。「一体これからあなたなしでどうやって生きていけばいいの、哀れで不幸せなこの私は？心優しい皆様、身寄りのない私を憐れんでください...」

オーレンカは喪章付きの黒いワンピースを着て、帽子や手袋は永遠に身に着けないこととし、外出することもまれになり、教会か夫の墓に行くだけとなり、家では修道女のような暮らしをしていた。6 か月が経ってようやくオーレンカは喪章を外し、窓の雨戸を開け始めた。時折、朝オーレンカが家の料理女と一緒に市場へ食材を買いに出かける姿が見られることがあったが、今彼女がどのような暮らしをしているか、そして家の中で何が行われているかについては推測することしかできなかった。例えば、オーレンカが自宅の庭で獣医とお茶を飲んでいて、獣医の方は彼女に新聞を音読してあげていることや、郵便局で知人の奥様と出くわしたことから推測されてはいたのだが、オーレンカは次のように言った。

「私どもの町には正しい獣医監督がおりませんから、そのために病気が多いのです。人々が牛乳を飲んで病気になったとか、馬や牛から感染したとかいう話をひっきりなしに聞くでしょう。家畜の健康に関しては、本質的には人間の健康管理と同じように対応する必要があるのです。」

オーレンカは獣医の考えを繰り返し言い、今やどんなことについても彼と意見が同じだった。明らかだったのは、彼女は誰かに執着することなしには一年と暮らせなかったということと、新たな自分の幸せを離れで見出したということだ。他の女性であればそれで悪く言われるところだが、オーレンカについて誰一人悪く思う者がいなかったのは、皆がオーレンカの人生はそういうものだと理解していたからだった。2人の間柄に起こった変化について、オーレンカも獣医も誰にも話すことはなかったし、秘密にしようと努めていたがうまくいかなかった。秘密にしておくことなどオーレンカにはできなかったからだ。獣医のところへ連隊の同僚が遊びに来ると、オーレンカはお客さんにお茶を入れたり夕食を振る舞ったりしながら話し始めるのだが、それが口蹄疫のことや真珠病のこと、街の食肉処理場のことについてであったため、スミルニンは酷く当惑してしまい、お客さんが帰ったあとでオーレンカの腕を掴むと、怒ってかりかりして言った。

「だから、分かりもしないことを話題にするなと言ったじゃないか！僕たち獣医が話し合っているときは、頼むから話に割って入ってこないでくれ。しまいには退屈だよ！」

するとオーレンカはびっくりして、不安げにスミルニンを見て、こう尋ねた。

「ウラジーミルちゃん、じゃあ私は何を話せばいいの？」

そうして、オーレンカは目に涙を浮かべてスミルニンを抱きしめると、怒らないでと懇願した。それで2人とも幸せだったのだ。
しかし、この幸せが長く続くことはなかった。獣医は連隊に同行して出かけて行ったのだが、連隊はどこかとても遠いところ、シベリア間際まで行ったものだから、まさに永遠に家を空けてしまった形になったのだ。そしてオーレンカは一人取り残された。

こうしてオーレンカは完全に一人ぼっちになった。父は随分前に亡くなってしまい、彼の肘掛椅子は脚が一本取れたまま埃をかぶり屋根裏に打っちゃってある。オーレンカはやつれて魅力を失い、道で出会う人が以前のように通りで彼女を見つめたり、笑いかけたりすることもなくなった。妙齢と言える時期が過ぎ去ったことは明白で、それについては考えない方が良い新しい未知の生活が始まりつつあったのだ。毎晩オーレンカが玄関に腰かけていると、「チヴォリ」で音楽が演奏され、打ち上げ花火がはじける様子が耳に入るのだが、それを聞いたところでもう何も思うことは無かったのだった。オーレンカは自宅の空っぽの庭を無頓着に眺め、何も考えず何も欲することなく、そして夜になると眠って空っぽの庭を夢に見たのだ。オーレンカはまさに仕方がないといった様子で飲み食いをしていた。

だが、何よりも悪いことに、オーレンカにはもう何も意見がなかった。自分の身の回りの物は見えていたし、周りで起こっていることは全て理解できたが、どんなことについても意見を組み立てられず、何を話せばよいのかもわからなかった。それにしても、意見が何もないとは何と恐ろしいことだろう！例えば、瓶が一本立っているとか、雨が降っているとか、農民が荷馬車に乗って走っていくところが見えても、その瓶や雨や農民が何のために存在するのか言うことができず、たとえ千ルーブルあげると言われても何も言えなかったろう。クーキンやプストヴァーロフ、そしてその後獣医がそばにいた頃は、オーレンカはあらゆることを説明できたし、どんなことだって自分の意見を言うことができただろうが、それが今や、オーレンカの頭の中も心のうちも中庭のごとく空っぽだった。よもぎを食べ過ぎたときのように、辛く、苦かった。

町は少しずつ四方八方へ広がっていき、ジプシー街も既に通りとなり、遊園地「チヴォリ」や材木置き場があったところには家や横町が増えつつあった。時が過ぎるのは何と早いものだ！オーレンカの屋敷は黒ずみ、屋根はさび、物置は傾き、庭中雑草とイラクサで覆われてしまった。オーレンカ本人はというと老けて醜くなってしまった。夏、オーレンカは玄関に腰かけ、胸のうちは相変わらず空っぽで退屈していて、ヨモギの味のような苦々しい思いをしていて、冬には窓辺に座り雪を眺めていた。春の気配が漂ってきたのか、風に乗って大聖堂の鐘の音が聞こえてきたのか、突然昔のことが思い出され、胸が甘く締め付けられ、目からは大量の涙があふれてくるのだが、これも一時のことで、また心は空っぽになり、何のために生きているのか分からなくなるのだった。黒猫のブリスカが甘えてきたり喉を鳴らしたりするのだが、猫がこうして甘えてきてもオーレンカが胸動かされることはなかった。

オーレンカに必要なのはそういうものではないのだ。必要なのは、彼女の存在や魂、理性の全てを鷲掴みにし、考えや人生の方向性を指し示し、老いゆく血潮を熱くさせるような愛なのだ。それゆえ、オーレンカは黒猫のブリィースカを裾から振り払って、腹立たしそうにこう言った。
「あっちへお行き...何もないわよ！」

こうして一日また一日と過ぎてゆき、一年また一年と過ぎたが、何の喜びも、何の考えもなかった。料理女のマーヴラが言ってくれることで十分だったのだ。

ある七月の暑い日、通りを街の家畜の群れが追い立てられて、庭中がもうもうと埃でいっぱいになる夕方頃、突然誰かが木戸を叩いた。オーレンカが自ら木戸を開けに行ったのだが、一目見て茫然としてしまった。門の向こうには獣医のスミルニンが立っていた。既に白髪になり、軍服ではなかった。不意に全てのことが思い出され、オーレンカはこらえきれずに泣き出すと、一言も発することなく彼の胸に頭を預けた。ひどく気持ちが昂っていたので、2人ともその後どうやって家に入り、お茶を飲もうと着席したのかわからないほどだった。

「あなた！」喜びのあまり震えながらオーレンカはつぶやいた。「ウラジーミル・プラトーヌィチ！一体どこからいらしたの？」

「ここにずっといようと思いましてね」とスミルニンは語った。「辞表を出し、定住することに賭けてみようと思いこうしてやって来たのです。それに息子をそろそろギムナジウムへ入れる時期ですしね。大きくなったものだ。私はと言うと、妻と和解したのです。」

「奥様はどちらに？」とオーレンカは尋ねた。

「妻は息子とホテルにいます、私はというと、借家を探しにやって来たんです。」

「まあ、あなた、うちの家を借りてくださいな！家の方がアパートよりもいいでしょう？ああ、私、あなたからは何も取りませんわ。」オーレンカは興奮して、また泣き始めた。「そこに住んでくださいな、私は離れで十分ですから。ああ嬉しい！」

翌日には既に家の屋根のペンキが塗られ、壁も白く塗られた。オーレンカは、両手を腰に当てて中庭を歩き回り、指示を出していた。顔には以前の笑顔が輝き出し、全身が生き返ったように元気を取り戻し、まさに長い眠りから覚めたかのようだった。やってきた獣医の妻は、やつれた不器量な女性で、短髪でわがままそうな表情をしており、少年サーシャを連れていた。サーシャは歳のわりに小さく（既に９歳になっていた）、太っており、明るい青の瞳にほっぺたにはえくぼがあった。すると、少年は家に入った途端に猫を追いかけ始めると、すぐに少年の明るく嬉しそうな笑い声が聞こえてきた。

「おばちゃん、これっておばちゃんの猫？」少年はオーレンカに尋ねた。「子猫が生まれたら、１匹ください。ママがネズミをすごく怖がるんだ。」

オーレンカがサーシャと話をして、お茶を飲ませると、まるでこの少年が実の息子であるかのように胸の奥が突然に温かく甘ったるく締め付けられたのだった。夕方、サーシャが食卓に座って復習をしていると、オーレンカは感動と哀れみの目でサーシャを見て、こうささやくのだった。

「可愛くてかっこいい子ねえ・・・坊やはこんなにも賢くて色白に生まれついたのね。」

「島とは」と彼は音読した。「陸地で、周囲を水で囲まれた部分のことを言う」

「島とは陸地で・・・」とオーレンカは繰り返すのだが、これは長い沈黙と意見の無い状態の後に彼女が初めて確信を持って発言した見解であった。

そしてもうオーレンカには自分の意見があり、夕食のときにはサーシャの両親と、今のご時世ギムナジウムで子どもたちが勉強するのは難しいことだが、それでも中学校からは至るところへ道が開けているので、昔ながらの教育は今の教育よりも良いということについて話していた。願えば、医者にもなれるし、技師にだってなれるのだ。

サーシャは中学校に通い始めた。彼の母親はハリコフの姉のところへ行ったきり戻らなかった。父親は毎日どこかへ家畜の検疫に出かけてしまうので、3 日に 1 回しか家へ戻らなかったため、オーレンカには、サーシャが完全にほったらかしにされているように思え、一家の余計者のように見えたし、サーシャが飢え死にしてしまうと思った。それゆえ彼女は、サーシャを自分の離れへと移し、そこに彼の小さな部屋を作ってあげた。

こうして、サーシャがオーレンカの離れに住み始めて既に半年が経過した。毎朝オーレンカは彼の部屋に入っていく。サーシャは、ほっぺたを片腕にのせて、ぐっすり眠っており、寝息も聞こえない。オーレンカは、サーシャを起こすのが可哀想になる。

「サーシャちゃん」と悲しそうに話しかける。「起きてちょうだい、いい子ね！学校へ行く時間よ。」

サーシャは起き上がり、身支度を整え、神様にお祈りをし、それからお茶を飲みに食卓へつく。コップ 3 杯のお茶を飲み、大きいブーブリカを２つと、バターを塗ったフランスパンを半分食べる。サーシャはまだ完全に目が覚めきっていないので、ご機嫌ななめだ。

「ところでサーシャちゃん、寓話の暗唱がまだしっかり覚えきれていないわ。」オーレンカはそう言って、まるで遠い旅に送り出すかのようにサーシャを見つめる。「心配だわ。本当に頑張ってね、いい子だから、勉強してね。先生の言うことを聞くのよ。」

「もぅ、ほっといてよ、頼むから！」と、サーシャは言う。

その後、サーシャは中学校へ向かい通りを歩いていくが、小さいのに大きな帽子をかぶり、背中にランドセルを背負っている。彼の背後から音もなくついて来るのはオーレンカだ。

「サーシャちゃーん！」と、彼女は呼び止める。

サーシャが周りを見回していると、オーレンカは彼の手にナツメヤシの実かキャンデーを握らせる。サーシャはギムナジウムのある横町で曲がると、背が高くてぽっちゃりとした女性が後ろを歩いているのが恥ずかしくなってくる。そしてサーシャは周りを見回してこう言うのだ。

「おばさん、家に帰ってよ。もう一人で行けるから。」

オーレンカは歩みを止めつつ、サーシャがギムナジウムの出入り口へ消えていくまでは瞬きをせずにその背中を見送る。ああ、オーレンカがどれほどサーシャを愛していることか！彼女の今まで抱いた愛情の中にこれほど深い愛情はなかったし、彼女の魂がこれほどまでに献身的に、無欲に、大きな喜びを伴って捧げられたことは無かった。まさに今、彼女の母性は胸の奥でますます燃え盛っていたのだ。この彼女と血の繋がっていない少年のためなら、その少年のえくぼや帽子のためなら、オーレンカは喜んで、感動の涙を流しながら自分の人生を捧げたに違いない。なぜか？誰にそんなことが分かるだろうかー　なぜか？

サーシャを中学校へ送り届けた後、オーレンカは穏やかな気持ちで、大いに充足し、安らかで、愛情に溢れた様子で家へと戻っていく。彼女の表情はこの半年で若返り、微笑みを湛え、輝いていた。道ゆく人たちは彼女を眺めると喜びを覚えて話しかける。

「こんにちは、かわいいオリガ・セミョーノヴナ！ご機嫌いかがですか、かわいい方？」
「今では中学校のお勉強も難しくなりまして。」と、彼女は市場で話して聞かせる。「何の冗談なのか、昨日は一年生に寓話の暗唱とラテン語の翻訳と、もう一つ課題が出ましてね...全く、小さな子がそんなに宿題などできるものかしら？」
　そして、オーレンカは学校の先生のこと、授業のこと、教科書のことを話し始める。話していることは全てサーシャが言ったことなのだ。
2 時過ぎには一緒に昼食をとり、夕方には一緒に授業の予習をして涙するのだ。サーシャをベッドに寝かしつけながら、オーレンカはサーシャのために長いこと十字を切って祈りを捧げ、自分も床につくと、遠くおぼろげな未来に思いを馳せる。サーシャが学を納めた後、医者かエンジニアになって、大きな自分の家を持ち、何頭も馬がいて、馬車もあって、結婚をして子どもが産まれる...
　オーレンカは眠りにつきつつずっと同じことを考えて、彼女の閉じた目から涙が頬を伝っていくのだ。黒い子猫はオーレンカのすぐそばで横になり、喉を鳴らしている。

「ゴロゴロゴロ」

　突然、木戸を強く叩く音がする。オーレンカは目覚めると、恐ろしくて息ができない。彼女の心臓が強く脈打つ。30 秒経ち、また木戸を叩く音がする。

「ハリコフからの電報よ。」とオーレンカは全身震え始めながら思う。「母親がサーシャをハリコフに呼び寄せているのだわ・・・なんてこと！」

　オーレンカは絶望している。彼女の頭、両手両足は冷えていき、彼女よりも不幸な人間は世界中どこにもいないのだと思えてくる。しかしさらに 1 分が過ぎ、声が聞こえる。獣医がクラブから帰宅したのだ。

「ああ、助かった」とオーレンカは考える。

　胸の内からは少しずつ苦しさが抜けていき、また楽になる。オーレンカが横になり、隣の部屋でぐっすり寝ているサーシャのことを考えていると、サーシャが時々寝言を言う。

「やっつけてやる！あっちへ行け！殴るなよ！」